槐（かい）

岡井省二創刊

令和2年8月号

令和二年八月一日発行　第三十巻第八号　通巻第三五〇号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

羽蟻の夜

高橋将夫

大本営発表五月ウイルス戦

軽鴨の子らもソーシャルディスタンス

蛍にも人にも会はず日日過ぎぬ

掃除機が吸い込んでゐる五月闇

五月闇地雷を踏まぬやうに行く

五月闇提灯だけが歩いてる

霊異記に出てきさうなる木下闇

花氷己が寿命が見えてをる

目を丸くして驚いてゐる目白

メビウスの帯を夏帯にはできず

築きたるものの崩るる羽蟻の夜

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

槐安集

加藤みき

御愛想の唇の形や梅雨晴間
逞しき五体なりけり胡瓜忌む
青梅や口中につばき満つ
雨あがり少し歩けば汗ばみて
青柿をふたたび摘果してゐたる

中島陽華

桜負うてクジラ博士がやつて来る
南無三もオンコロコロも春さ中
子の頬に真直な日差し山笑ふ
のどけしや柱に飾る亀の甲
起き臥しの遠山の秀や柏餅

竹内悦子

赤潮や大きな鍋に湯が涌いて
象牙なる天狗の根付半夏生
アルゼンチンタンゴとワイン夏の宵
藍染の風呂敷八十八夜かな
古茶新茶遠州織部大徳寺

雨村敏子

水無月の真珠の釦湖の國
柿若葉はるかなる人連れてくる
椿百花落花の白の祈りかな
せつせつと胸の火灯し春惜しむ
いち日を使ひきつたり藤の花

近藤喜子

こんこんと清水湧くごと我に詩を
先送りの結論なんじやもんじやかな
なんにでもタイミングあり巣立鳥
光の子あそび疲れし昼寝かな
松蟬にも吉日のあり声そろふ

瀬川公馨

よもぎ餅類猿人となりぬべし
豌豆の巻きひげガッタンカーメン
生き残り賭けてや雀のてつぱう
杜若無調の音の流れたる
麦の穂のバッキンガムの兵士たち

柳川晋

悼梶原喜高君（蟹商、コロナ禍）

本当は五月が旬の多羅波とぞ
人類に幾度目の危機聖五月
大権を狙ふ女の鵜の目かな
早く来て穢れを祓へ梅雨の風
天気図に海の広がる五月かな

熊川暁子

生けしもの護身の知あり若葉燃ゆ
体内に水張るごとく代田掻き
青山河にんげん何処に居ても点
木洩れ日にものの怪姫の立泳ぎ
期するもの天上にあり揚ひばり

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

江島照美

大入りを夢見てばかり踊子草
量感は存在なりし黒牡丹
更衣そのままにする妣の物
春疾風追ひし心の絡まりぬ
あまりにも滴る山の立ちにけり

寺田すず江

好き好きに装ふ山の五月かな
蓮浮葉鯉のゆらりと貌を出す
麦秋や穂波の揺るる地平線
考へる貌して暫し青蛙
立夏夕焼おのれの影の濃くなりぬ

田中信行

育ちしは古寺の門前柏餅
アルゴリズムの世といへど子供の日
人気(ひとけ)なき聖堂の朝夏燕
テレワーク先ずは小猫の動画かな
焦り失せ緑雨の涙マリア像

岩月優美子

目に染みて心に浸むる柿若葉
曲折は世の常牡丹散りにけり
焦らずにわが道を行く蝸牛
蟇鳴いて森の静寂破りたる
物忘れも時に愛嬌麦の秋

岩下芳子

菖蒲湯を出でたるあとの般若湯
葉櫻の風に押さるる波頭
薔薇垣の向ふに人の見え隠れ
潮まねき切れぬはさみの使ひやう
五月波一万パワーの発信力

有松洋子

初幟風の勇みて集まり来
初夏や白帆のごとく航け少女
まだ恋を知らぬ少年草の笛
薫風や術後の友のこゑの張り
青葉風吹きぬけ図書館再開す

近藤紀子

覚束な貝母巻鬚わが手かな
とつ國の子の窓過る青葉風
青葉木菟を待つてをりける三年かな
梅雨真近あをく重なる竹の幹
春宵や虚空漂ふ雲のある

竹中一花

若葉から若葉へ風の空になる
遠く来て半夏の雨や街眠る
病葉に海の落暉の照り返す
麻活くや鏡に映つる青き風
飛車角や棋盤に揺るる青葉光

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

前田美穂子

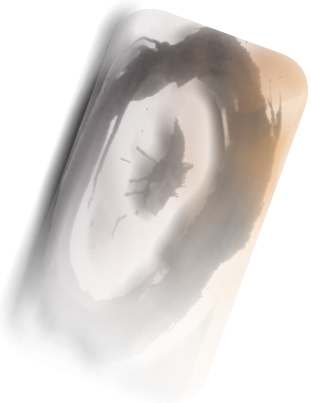
信長のゆかりの寺の躑躅燃ゆ
青嶺なる二上山と語らひぬ
短夜や夢の続きは彼の世にて
叢雲に因へられたる夏の月
郵便夫早足となる立夏かな

中田禎子

半夏生草小流れに添ひ男下駄
野茨の宙に男時を捉へける
拡散の吐く息無色紫荊
沈黙の水の地球やコロナ炎ゆ
青嵐大風呂敷のひるがへる

吉田順子

蓮浮葉に鯉の口ひげ動きをり
緑蔭に聴く思はざる越天楽
天日にこころ透けゆく柿若葉
葉隠れに青梅見ゆる虚空かな
母の日や妣のちぎり絵壁に吊る



槐賞受賞作品二十句

阪倉孝子

補陀落の一閃にあり宝船
綿菓子へ巻きとられける花の風
藤房は風になるまで揺れてをり
光りつつ去りゆく人や春の星
朧夜やひらがなのごと眠りける
晩節を豊饒の地へ挿し木する
かごめかごめうしろは春の歓喜天
一つづつ肩の荷おろし蓬つむ
花電車はるかなる人あふれをり
くれなゐの思ひありけり白牡丹
さはさはと誘ひくる風蓮ひらく
美しく老ゆる鏡よ浮いてこい
観覧車大きな秋とふれにける
色鳥となりて天竺訪ねたき
黄落の奥に時空の扉あり
晩節の自由席なり大花野
露の世へ残されし身の発光す
あつあつの米の功徳や寒卵
しんしんと言の葉紡ぐ暖炉かな
花終へし枯蓮に見る佛陀かな

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

槐市集

植木戴子

青東風の角を曲るやけやき道
白玉のカットグラスの窮揺るる
碗豆の英むいてをる白寿かな
なだらかな力ーブ杉菜の青さかな
産土の筍の里昏れにけり

大塚たきよ

ランナーの行き交ふ河川五月風
母の日やメモ重箱の上に置く
味覚良し嗅覚も良し夏の風邪
鰻屋の匂ひ秤に掛けてみる
鳥轍すバードウイークリフトかな

河添久子

涼風や音色弾ける駅ピアノ
白虹を追ひかけてをり夏の尾瀬
三尺の藤房揺るる風のあり
鶯のひと声聞きし今年また
早苗田やすうつと走る雲の影

久保夢女

春夕焼ジャングルジムもシーソーも
逆上がりその一心に蝶の来し
菖蒲湯ややつと愛してくれし母
泣き声をほめて帰りぬ初節句
神様の大盤振舞五月晴れ

阪倉孝子

雨の日の心灯すや枇杷明り
枝豆へ膝つき合はす笑顔かな
力み抜け螢袋へまどろみぬ
うたた寝の文机にあり落し文
浄土へ灯す祈りや曼陀羅華

岡田桃子

首上げ渡り切ったる沼の蛇
目が合ふて緑へ返る迷ひ熊
麦秋の今朝も件の熊情報
団十郎てふ朝顔の苗賜りぬ
陽の色に姻む林の白糸草

荻布貢

竹林の大空揺らす青嵐
涼しさや鴨の川辺の水の音
道灼ぐや猫の肉球の災難
同胞の存亡かけて夏の陣
ナイターや何時まで続く月曜日

柴田靖子

小躍りをしてゐる水や夏に入る
はやぱやと茅の輪をくぐりたき日なり
野も山も青々と風薫る
淑やかな気分になりし扇子かな
すする音にぎやかとなり心太

庄司久美子

蚊のとまる格天井のサンバかな
青赤の揺るる信号雨蛙
足を組み手をくみし走り梅雨
鼻唄の爺杖つく柿の花
青蛙ペコチャンの舌気になりし

杉原ツタ子

古座川の水蒼あをと夏葡
秘境とはこんなもんです花蜜柑
風呂敷をたたむ八十八夜かな
潮騒と母の指貫半夏かな
柿若葉駐車スペース空いてます

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

槐集

春の禍に未知の世界の扉開く　大阪　藤田美耶子

弱点をあらはにしたり春ウイルス

眼力は生き抜く力武者人形

こんな時は薔薇の花束己がため

菖蒲湯に自然治癒力とりもどす

青葉潮胸の渚へ満ちて来る　枚方　阪倉孝子

花莫莚へひとりの気儘観世音

万緑の山ふところへもぐり行く

五月闇こころの乾き置き去りに

暮れなづむ頃や孤高の白牡丹

噴水の望みは空の果てまでも　岡崎　柴田靖子

蠅打てば少し痛みし我がこころ

変はることなく音もなく清水かな

時うつり琥珀色なす梅酒かな

かはほりの声なく夕空とびゆけり

かぐや姫の位置情報は月の道　大阪　平野多聞

蚕豆の妊婦のごとき曲線美

正面に我が実相と河骨と

仏法僧法話はデジタル回路にて

遮断機の向かうに核と蓮池と

烏賊は墨一度は吐いて大人ぶる　守口　三木亨

若楓一葉一葉が風とハグ

夏の蝶コロナのことは知らぬふり

若葉なる風と光の変換器

矢車が月と語らふ竿の上

入れ替はるふたつの世界更衣　和泉　阿部さちよ

行く春や薬の残り数へをり

草木の逞しきかな新樹光

草臥れし看護服へと若葉風

母の日や地球の母ををさな問ふ

高橋将夫選

銀河往来

高橋将夫

菖蒲湯に自然治癒力とりもどす　藤田美耶子

菖蒲湯は菖蒲の力によって邪気を払い心身を浄めるという。特効薬もワクチンもない新型コロナ流行のご時世、菖蒲湯に入り自然治癒力を高めるのも一法かと思う。

〈眼力は生き抜く力武者人形〉〈こんな時は薔薇の花束己がため〉の句、誠にその通りだと共鳴する。

青葉潮胸の渚へ満ちて来る　阪倉孝子

なんとも詩的な一句。慶びで心が満たされる思いがする。

〈花莫莚へひとりの気儘観世音〉〈万緑の山ふところへもぐり行く〉〈暮れなづむ頃や孤高の白牡丹〉、どの句にも豊かな精神の風景が描かれている。

噴水の望みは空の果てまでも　柴田靖子

「望みは空の果てまでも」は若々しい精神の発露。大いに賛同する。

〈変はることなく音もなく清水かな〉は清水の本質に迫る。

〈かはほりの声なく夕空とびゆけり〉はなんでもない句だが、時が時だけに思わず新型コロナが脳裏に浮かぶ。

遮断機の向かうに核と蓮池と　平野多聞

遮断機に隔てられた向こう側の世界にある核と蓮池。核は現代科学の暗部の象徴で、蓮池は仏の精神世界の象徴であろう。

破滅と救済の対比ともいえよう。

〈蚕豆の妊婦のごとき曲線美〉は蚕豆のふくよかな曲線を想起させる。この作者ならではの着眼。

夏の蝶コロナのことは知らぬふり　三木亨

外出自粛を余儀なくされている身を思う時、自由に飛び回っている夏の蝶を見ると一言皮肉を言いたくもなる。

〈若楓一葉一葉が風とハグ〉の句、若楓の一葉一葉が風とハグするのに気付くのも三密自粛の今だからこそと思う。

〈矢車が月と語らふ竿の上〉の句、夜は鯉幟が降ろされて矢車だけが竿の先に残されている。そんな矢車を気遣う一句。

草臥れし看護服へと若葉風　阿部さちよ

若葉風は新型コロナ治療の最前線で戦った看護師への感謝のエール。くたびれた看護服は勲章。

〈母の日や地球の母ををさな問ふ〉の句、今日は母の日と言ったら、「それなら地球のお母さんは何」とでも聞かれたのであろうか。地球の起源を問うとはなんともおしゃまな子ではないか。

薫風や巷の風のあやしきよ　竹村淳

本来なら初夏の風薫る絶好の季節なのに、巷を吹く風にもどこかあやしさが感じられる。これも皆新型コロナのせいか。

〈千手観音吾に給ふはどの指ぞ〉は無季だが前句に田植の季語があるので、連作として採った。〈粛粛と指示に従ひ風明か〉は秋の季語の「さやか」として採った。

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon